

# くすり博物館だより

VOL. 57

平成19年(2007)7月

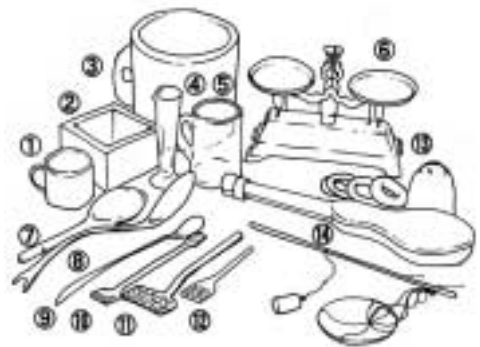
NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY



内藤記念くすり博物館  
〒501-6195 岐阜県各務原市川島竹早町1  
Tel: (0586) 89-2101 Fax: (0586) 89-2197  
http://www.eisai.co.jp/museum/

企画展「薬と秤」開催期間 2007年7月12日(木)～2008年3月30日(日)

テーマ特集◆くすり博物館とともに一私の三十七年一



### ▲ はかるためのさまざまな道具類

- |                       |                          |
|-----------------------|--------------------------|
| ①金属製計量カップ             | ⑦計量スプーン                  |
| ②③枡 <small>ます</small> | ⑧⑨薬さじ                    |
| ④メートルグラス              | ⑩⑪⑫丸薬計数さじ                |
| ⑤ガラス製計量カップ            | ⑬磁製 <small>おもり</small> 錘 |
| ⑥上皿天秤                 | ⑭銀秤                      |

現代人の生活に「はかる」ことは欠かせません。人間が最初に「はかった」のは農耕に必須な「時間」であったと言われており、その後、「長さ」や「体積」をはかるようになりましたが、「重さ」はずっと後のことでした。

重さをはかるために最初に考案されたのは、1本の棒の中心を支点に、両端に皿を取り付けてバランスをとり、片方におもり錘をのせてはかる「天秤」です。エジプトでは紀元前5000年頃のものと思われる天秤が発見されており、ローマ時代に「秤秤」がさおばかり発明されるまでの長い間、唯一重さをはかる秤として使われてきました。

一方、くすりは人間の歴史と共にありました。太古の昔から、人々は大自然の中で狩猟をしたり、草木を採集して生活してきましたが、同時に、毒になるもの・薬になるものを経験的に知ようになりました。自然のものを薬にしていた時代から、濃縮など加工して薬にするようになり、さらに近代に入り、有効成分だけを抽出するようになると、有効性と安全性の確保の観点から、厳密に量をはかることが必要になりました。すなわち、くすりはその「量」によって毒にも薬にもなり、「薬」と「秤」が密接な関係になったのです。今や、くすりの製造にも品質を保証するためにも「はかる」ことは基本になっています。

当館には総数1,000点余の度量衡資料を収蔵していますが、薬学・薬業に関するものだけでなく、あらゆる分野にわたって集められているのが特徴です。今回その中から、江戸時代から昭和にかけての天秤、秤秤、容積をはかるます枡、計量カップなど約400点を展示に供します。

開催にあたり、秤乃館館長・秤屋健蔵先生をはじめ、日本計量史学会・山下喜吉先生ほか、ご指導、ご支援を賜りました関係者、また、貴重な資料をご提供いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

館長 篠田愛信



### ▶ 天秤

守谷定吉製作 明治41年(1908) 26×22.7×11.5  
西洋の医学・薬学が導入されると、調剤や化学実験にも精度の高い秤が用いられた。

資料の説明は、資料名/作者/年代/サイズ(縦×横×奥行)の順に記しました。秤秤は、さおの長さとお皿の直径を記載しました。サイズの単位はcmです。データのない部分は省略しました。



# 重さをはかる

重さをはかる秤にはさまざまな種類があります。この中で江戸時代によく使われたものに、天秤と桿秤があります。天秤がよく用いられたのは両替屋です。当時の貨幣には金貨・銀貨・銭貨と3種類ありました。市場で用いられるのは銭貨でしたので、<sup>ひょうりょう</sup>お金を使う時には、金銀貨を銭貨幣に両替しなければなりません。

しかも、重さによって額面が変わる秤量貨幣だったため、両替の時には重さを正確に調べ、交換比率にしたがって換算する必要がありました。そのため、両替屋に天秤はかせない道具であり、そこから現在、地図上で銀行を表す記号（右下図）に分銅の形が用いられるようになりました。桿秤は天秤に比べて部品が少なく、持ち運びにも便利だったことから、日用品をはかる道具として普及しました。

このように、秤の正確さは国家経済から庶民の生活まで深く関わっており、それは幕府の統制により守られていました。幕府は日本を東西に分けて秤座という専門集団を作り、東は<sup>しんずい</sup>守随家に、西は<sup>じん</sup>神家に秤の統制を行う権限を与えました。そのため、秤の製造・販売・修理・検定はすべてこの秤座が独占的に請け負っていました。

明治時代になってからは、秤を改良したり、西洋の秤の使用も認められるようになり、種類も増えていきました。



## ◀ 両替天秤

中堀善太郎製作 江戸時代  
79×80×29

分銅は正式な取引に使用する金属製のものが19個、木製で簡易に使用するものが9個ついている（写真下）。両替屋は、小槌で針口を叩き、天秤が釣りあっているかどうかを確かめた。（写真右；『人倫訓蒙図彙』より）



## ▶ 銀秤

神善四郎製作  
江戸中期

さお=33.8 皿=15  
銀秤はもともと銀貨をはかる秤だったが、少量のものをはかるのに便利だったため、薬屋でも使用された。

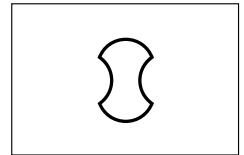
## ▼ 香具秤

神善四郎製作  
江戸初期

さお=52 皿=15  
宮中や幕府などへ納められた特別製の秤で、香料となる伽羅や白檀などをはかるために使われた。



## ▼ 銀行を表す地図記号



## ▼ 調剤用上皿天秤

昭和時代／大阪  
20×14.5

明治時代以降、漢方医学から西洋医学へと移り変わり、調剤用の上皿天秤が普及した。この天秤の組分銅は、0.1gから50gまでのものが揃っている。





▲ 上皿桿秤  
東京・守谷製造 明治29年 32×59×35  
錘は6個あり、右側につぎたして重さをはかる。



▲ (左より) 振り子式自動指示秤 37×24×17  
1900年前後のものと思われる。台の上に物を載せると、台が下がり、下の振り子が目盛を指す仕組みの秤。



バネ式上皿自動秤 日本製 大正時代 34×25×20  
上の皿に物を載せると、バネの力で重さを表示する仕組み。現在でも同種のもが家庭で使用されている。



バネ式手秤 昭和25-33年 33×φ2.5  
上部を手で持ち、下のかぎに物を吊るしてはかる仕組み。



くすり博物館収蔵資料集⑤『薬と秤 重さをはかる』  
天秤、桿秤、バネ秤など、168点の所蔵資料をカラー写真で紹介しています。  
A4判84ページ 定価2,000円です。  
図録監修 秤屋健蔵先生(秤乃館館長・日本計量史学会会員)

## 秤乃館 ～秤屋健蔵さんに聞く～

今年度の企画展は、三重県四日市市にある博物館「秤乃館」にご協力をいただいています。

秤乃館は平成3年(1991)に開館しました。館長の秤屋健蔵さんは、37年にわたって日本各地で度量衡に関する諸資料10,000点を収集されました。中でも多いのは秤で、資料数は5,800点を越えています。現在はその膨大なコレクションの中から、常設展・企画展あわせて、約1,000点を展示しています。

館内には、江戸時代の両替商の店先が再現されています。また、コレクションの中には、外国製のものもあります。イギリスで1880年代に使われた上皿自動秤は、黒地に花の絵が描かれており、装飾品としても美しい一品です(写真右上)。アフガニスタン製の上皿天秤は1890年代のもので、宝石の原石の取引に用いたそうです(写真右中央)。

秤屋先生は、こどもの頃からいろいろ収集され、また、青絵の茶碗など古いものが好きだったそうです。ところが、ある時、「天下一」と刻印のある銀秤に出会ってからは、いっぺんに秤の世界に引き込まれました。なぜ秤が好きなのか、という質問をしたところ、先生は次のようにお話しくださいました。

「秤は、うそいつわりがなく、取引の原点ともいべき道具でしょう。人間が生まれてきて最初に使う道具は、赤ちゃんの体

重をはかる秤ですね。それに、弁護士さんのバッジの真ん中にも、天秤が描かれています。薬をはかるということも、人の命にかかわる重要なことです。秤は、<sup>まこと</sup>真実という、人の心をとらえる道具なんですね。」

もともと会社勤めをされていた先生ですが、仕事の休みの日には全国を回り、野宿をしてまでも貴重な秤を手に入られました。くすり博物館に寄られた時には、<sup>まこと</sup>真実という、人の心をとらえる道具なんですね。たくさんの秤を、当時の学芸員に見せてもらったことにも刺激され、より素晴らしいコレクションを目指そうと誓ったそうです。

「私は常に「夢出会い」を大切に思っています。秤は先人の知恵の結晶です。「秤たち」が私に後世に伝える役割をくれたのだと思います。」

と語られた後、  
「それから、給料をつぎ込んでしまった私を支えてくれた妻に、ごめんなさいとありがとう、と言いたいです。」  
とおっしゃられた笑顔が印象的でした。

秤乃館  
【開館時間】 9:30-17:00  
【休館日】 毎週月曜・年末年始  
(12/28-1/5)

三重県四日市市中野町1163  
電話・FAX 059-339-0936  
◆近鉄富田駅下車で、三岐鉄道に乗り換え、保々駅下車徒歩15分  
◆東名阪自動車道四日市東ICより10分

(インタビュー・構成 稲垣裕美)



秤屋健蔵先生

## くすり博物館とともに 一私の三十七年一

内藤記念くすり博物館の初代館長であり、退任後は顧問を務めた青木允夫が退職しました。ここに在職中の思い出を語ってもらいました。

私は昭和45年（1970）にエーザイ株式会社に入社し、創業者で内藤記念科学振興財団の内藤豊次理事長（当時）の下で史資料の収集に奔走し、翌46年（1971）には、くすり博物館が開館しました。それ以来今日までの37年間、多くの皆様方の温かいご支援、ご指導をいただき、充実した毎日を送ることができました。

入社する前は、病院で薬剤師として勤めていましたが、エーザイ川島工園を初めて訪れた時には、博物館が素晴らしい環境に立地していることに驚嘆し、未知の世界に挑戦する覚悟を新たにしました。

多くの思い出がありますが、特に心に残ることをあげてみます。開館まもなく、初めて学芸員が配置され、「くすり博物館だより」を創刊しました。以来今日も年2回発行し、



建設当初のくすり博物館  
（本館のみの頃）

PRに貢献しています。

PRに貢献しています。いくつかの特別展の開催も今から思えば、よくぞ実現できたものと思っております。これも社内はもちろん、共催していただいた日本医師会、大阪大学、国立科

学博物館、会場を提供くださった各地のデパートの方々のおかげです。

史資料・図書は、当初は何一つなく、文字通りゼロからの出発でしたが、内藤理事長の「史資料提供のお願い」に応じ、全国各地の医薬関係の旧家、医薬史研究者、コレクターなど幅広い分野の方々のご協力いただきました。

数万点に及ぶ資料・図書は、初め、1点1葉のカードで管理していましたが、まもなく登場したカセット式の住所録用コンピュータを応用して管理することを試みました。しかし、1本のカセットでは200件くらいしか登録できず、断念。続いて出回ったパソコンへと早速切り替えました。これによって、データの内部管理はもとより、外部からの問い合わせにも瞬時に対応できるようになったのは、夢のようなことです。

資料の整理登録作業は容易なことではありませんでしたが、医薬関係の面白い錦絵や、大同薬室文庫中の有名人の書や書簡、美しい絵地図などに会ったときは、この仕事に喜びを感じました。退職したこれからも、古文書などの解説に余生を送りたいと思っています。

内藤理事長が目指した「総合的なくすり博物館」は、展示館・植物園・図書館が完成し、工場見学もできる、世界にも類のない博物館になりました。これからも、もっともっと内容を充実し、皆様方に利用していただけますことを祈念し、退職のご挨拶とさせていただきます。長い間のご支援、ありがとうございます。



開館当初の展示室と図書室  
（本館にありました）



**【青木允夫略歴】** 新潟県出身。富山薬学専門学校（現；富山大学）卒業、新潟医科大学薬局勤務を経て、新潟県立新発田病院勤務。昭和45年にエーザイ（株）入社。翌年の開館時より平成2年（1990）まで館長。日本医史学会評議員、日本薬史学会幹事、岐阜県博物館協会副会長等歴任。

## とびっくす

### ■薬草観察会が好評です

毎月第2土曜日（12月を除く）に薬草観察会を開催していますが、2006年度はその参加者数が、のべ781名になりました。

その季節に咲く薬草の花や実を観察し、各種の薬草の使い方などを紹介していきます。開催時間は、10：00～11：30で、参加無料です。スタンプカードもありますので、ふるってご参加ください。



### ■薬草園フェスタを開催しました

5月19日（土）に、1,159名の来場者をお迎えして、薬草園フェスタを開催しました。当日は、雨上がりで風が強かったのですが、どなたもお目当てのコーナーを訪れては、苗の寄せ植えや染め物などの体験を楽しまれました。

### ◆◆資料・図書ご提供者ご芳名◆◆

石川透、江崎利治、回生堂元草生薬店・品田昭一、柏木政伸、河野亨、(株)スズケン沖縄薬品、武田科学振興財団、長野仁、秤屋健蔵、松下薬局・松下美智代、山内英司、山下喜吉、米田該典

～ありがとうございます～

（敬称略／五十音順）

### 内藤記念くすり博物館

開館／9:00～16:00

休館／月曜日  
年末年始

館長 篠田愛信

学芸員 稲垣裕美（編集担当）

学芸員・司書

野尻佳与子・伊藤恭子

庶務 森田麻起子

小島敦子・沼田 望

（見学受付）

薬用植物園（栽培管理）

冨谷辰行 亀谷芳明 筒木 渡

アドバイザー 逸見誠三郎

### お詫びと訂正

『くすり博物館だより』56号の1ページ目下から13段目の記事に間違いがありました。お詫びして訂正します。

誤「SAAS」→正「SARS」